

<研究ノート>

## 改革開放後の「新イデオロギー」をめぐる 都市部中間層の対応

—北京の聞き取り調査から—

王 鳳

1. 開放された欲望
2. 「新イデオロギー」の確立
3. インタビュー調査について
  - (1)インタビュー調査の概要
  - (2)中間層について
  - (3)分類の基準
4. 中間層の対応
5. 考察

### 1. 開放された欲望

改革開放後の中国は、経済の活性化と同時に、今まで固定化されていた社会階層構造が大きく変わった。また、経済や社会構造の変化に伴い、人々の意識も大きく変容し、自分の社会的地位や生活様式に対して、多くの期待を抱え、欲するようになった。つまり、経済の開放などにまつわる政府の施策によって、計画経済時代に抑え込まれていた「欲望 (desire)」も開放されるようになったといえるだろう。

上述の中国の状況を理解するのに、日本の社会学者作田の次の言葉を引用すると有効であろう。「近代化に伴い、身分の枠が廃棄された結果、それまで望むことを禁じられていた客体に対し、すべての人々が平等に願望する権利を与えられるに至りました。そのために、だれもがだれもの欲望を模倣する傾向が現れてきました」（作田啓一 1981：195-196）。また、階層研究の専門家である孫立平が、「過去二十年の中で、中国社会の中で一番早く成長したのは何かというと、経済と、欲望と言っていいだろう。其中でも、欲望は経済成長に増して大きく膨らんでいる。20数年前は禁欲の社会だと言ってもいいような社会だったが、今は欲望が際限なく膨らみ続けている」（孫立平 2004）と言っている。

これらの言葉のように、社会主義体制の中に市場経済の要素を導入することによって、中国社会は「禁欲社会」から大きく変わり、欲望が際限なく膨らむ社会と描かれるようになっていく。さらに、この認識をもとに、人々の物欲を転移する働きをしてきた儒家精神などに代表される中国伝統文化の価値観や共産主義の価値観などが無効になった今、新しい「文化建構 (価値観)」を作ろうと真剣に考案する立場 (程文超 2005) があり、文学鑑賞にもたらされる感動と審美の感覚に人々を物欲から救う力を持っていると期待する立場 (王曉明 2006) もある。

このように、90年代以降市場価値が顕彰される中国社会について、「ある種の精神的アイデンティティ」の救済が必要なほど、人々は道徳が廃れどんどん物欲に溺れていく時代になっているというのが、一般的な認識になっている。

以上の見方は、欲望という言葉を使うことによって、1978年以降の中国社会が個人の経済的利益への追求などを代表とする欲望が開放された社会になったことや、それまでの計画経済時代の社会における人々の意識の変容を敏感に射止めている。ある意味では、この認識がここ30年間に渡る中国社会の変動を見てきた人々の実感をついているだろう。

しかし、次のような疑問も残る。つまり、人々の意識というのは、そのまま「欲望」の開放という改革開放後の時代精神の変化に伴って、何の滞りもなく移り変わることが出来るのか。つまり、欲望が開放されている社会を生きる人々は、新しい時代精神に合せることに無理が生じないのだろうか。また欲望の成就が困難な場合、どのような生活倫理をもって折り合いをつけているのだろうか。

本稿は、以上の問題意識を持って、次のように考察を展開していく。まず第一節では、改革開放後の時代精神を「新イデオロギー」とする先行研究を紹介し、生活者の意識という面から捉える必要があると指摘し、第二節以下では、北京市の中間層を対象に行ったインタビュー調査の概要を紹介し、第三節では、現在の生活への満足度を横軸に、自分と社会との捉え方を縦軸にし、インタビューの対象者を同調型、追従型、反省型、距離型という四つのパターンに分類し、第四節では、それぞれ四つのパターンの語りを取り上げ、彼らは新イデオロギー的価値観を生きながらも、距離を取りつつ、それぞれ違う対処の戦略を取っていることを考察する。

## 2. 「新イデオロギー」の確立

改革開放後の中国社会における時代精神の変化を捉える研究で、中国文学研究領域の成果が多数ある。1949年から1978年に改革開放が実施されるまでの中国現代史の27年間は、個人の欲望が「民族・国家」イデオロギーに隠され抑圧されていた時代であったが、1978年以來、市場価値を導入することによって、個人の欲望はようやく「集体欲望」という政治話語の抑圧から解放された（程 2005）。これらの成果から、個人の価値を追求する欲望が社会生活に登場するようになった過程がうかがえるだろう。

また、大衆文化の隆盛により、政治社会であった中国社会では世俗化の過程が起こり、消費神話を主とする新しい時代精神が生まれた（馬航飛 2006）などのような議論がある。

さらには文学研究者の王曉明が、1992年以降の中国社会は市場価値の称揚を最高の価値とする「新イデオロギー」に覆われている（王 1995）と結論付けている。つまり、改革開放当初市場価値が持っていた、個人が政治話語から自由になるという過程への介入という積極的な意義を失い、「欲望話語が逆に抑圧的な力を持ち始め、憚ることなく、人々を虜にして」（王宏図 2005）いる。

欲望の開放や氾濫というふうには、現代中国を生きる人々の意識を捉える上記の議論は、社会構造の変動によって、個人の意識が一方的に決定されるといった、ある意味では、「上」から、または「外」からの視点が殆どだと言えよう。そこから、社会構造や時代精神の変化が見えたが、現実を生きる生活者としての内心が見えてこない。また、欲望が開放された社会を生きる人々にとって、自由に欲望を持つことができるが、これは、欲望の

成就が困難な場面とも常に遭遇することも意味する。その場合、どのような意味世界を持って対処しているのか、ということも重要な問題であるが、上記の議論では答えが用意されていない。市場価値が中国社会の「新イデオロギー」になり時代精神となり、この歴史的文化的状況のもとで生きている人々は、本人の意志と関係なく、この市場価値や消費神話を内実とする「新イデオロギー」との関係に身をおくことになるが、それが「虜」にされるという一つの関係に限定されていないように思われる。

以下では、インタビュー調査のデータを利用し、現実の生活の捉え方と「新イデオロギー」との関係という二つの面から、現実を生きる生活者の意識を考察する。

### 3. インタビュー調査について

#### (1) インタビュー調査の概要

2006年の8月に、北京市内に在住している18人を対象に、インタビュー調査を実施した。一人当たり約1時間半から2時間半をかけ、調査対象者のライフヒストリーに沿って、経歴と現在の生活への評価を中心に聞き取りを行った<sup>1)</sup>。調査対象は、知人による紹介が主であるが、その中で調査対象に次の方を紹介してもらったケースも何件かあった。

#### (2) 中間層について

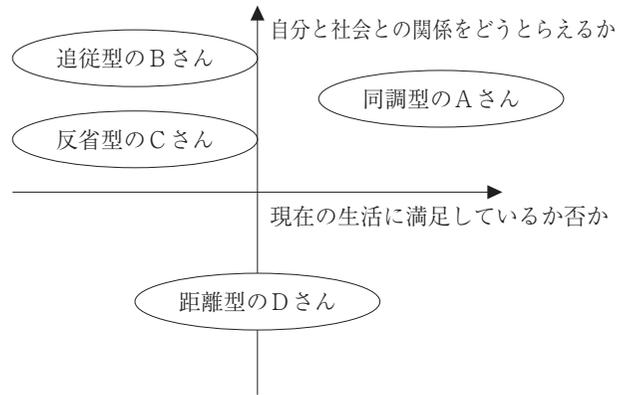
近年、改革開放以降の中国社会で起こった階層構造の変動について、陸学芸『当代中国社会階層研究報告』（陸 2002）などに代表される研究成果が多く生み出されている。陸（2002）では、教育資源、文化資源、組織（権力）資源を基準に中国社会を十の階層に分類した上で、中国の都市部では、社会階層構造はオリーブ型の近代的な特徴を持っており、中間階層が迅速に拡大していると結論づけ、さらには、十の階層を、上、中の上、中の中、中の下、下と五つの層に分けている。その後中間階層とはニュアンスが違う「中間階級」というキーワードで改革開放後に出来た富裕層についての研究も盛んに行われているが、本稿では、園田（2001）による中国中間層に関する考察の中で使われた、「自営業層を旧中間層、ホワイトカラーを新中間層」とする分類を借用し、職業を分類の基準とし、ホワイトカラーとして働いているという意味で調査対象者を中間層とする。

#### (3) 分類の基準

ここではまず、問題意識に立ち返ってみよう。社会が活性化し、市場価値や消費神話を内実とし、個人の経済的成功を表象とする新イデオロギーが成立し、人々は個人の利益を欲望するようになった。では、新たな価値基準となったとされる「新イデオロギー」に対して、中間層の人々は現在の生活をどのように捉えており、どのような対応をしているのか。2006年8月の調査から、いくつかの違うパターンが見られた。

以下では、下図のように、①現在の生活に満足しているか否か、②自分と社会の距離関係をどのように捉えているか、という二つのことを基準に四つのパターンに分類することを通して、考察を展開していきたいと考える。

- パターン1：同調型のAさん
- パターン2：追従型のBさん
- パターン3：反省型のCさん
- パターン4：距離型のDさん



横軸：現在の自分の生活に満足しているか否か

縦軸：自分と社会との関係をどのように捉えているか

#### 1) 同調型のAさん

自分のことをある程度「成功」していると認め、満足している。自分の労働より、社会から多くのものを報われている。

#### 2) 追従型のBさん

今の自分の生活に満足しておらず、経済的にもっと成功したい。そのために、身近にいる、成功している友人をいろいろ見習っている。

#### 3) 反省型のCさん

今の自分の生活に満足しておらず、自分のことを「失敗」だと捉えているが、その失敗を社会に帰さない。あくまでも、自分の性格に原因を求め、自分自身の心理的問題の解決に改善策を求めている。

#### 4) 距離型のDさん

今の自分の生活に満足していないが、しかし、現在の不本意を、社会の現象として説明する。不正や不公平が横行している社会像を持っていることにより、自分とそうした社会状況をはっきりと区別して捉えている。その代わりに、多くの人のためになる「公益」事業に価値を見出している。

### 4. 中間層の対応

以下では、それぞれの語りから、◆今の自分の生活をどう評価するか、◆自分と社会との関係をどう捉えるか、◆折り合いのつけ方、という三つの方面から、以上の特徴について詳しく見ていきたいと考えている。

#### 1) 同調型のAさん

Aさんは、山東省出身、2006年8月現在31歳。0歳の息子と妻の三人家族。2003年にローンを組んで分譲マンションを購入。月収は5,000元前後。

Aさんは1998年に地方の師範大学を卒業後、北京の名門大学に入り、国際関係学専攻の「双学士」（大学院に当たる）コースを終了した。その後、国営大手新聞社に就職し、四年間編集の仕事をしたのち、二年ほど前に現在の国際部の職に移った。仕事で海外を訪れる機会が多いという。

◆今の自分の生活をどう評価するか

Aさんは、今の月収の5,000元は、北京市では高い収入とはいえないとやっている一方、今の生活に満足している様子を見せている。今までの人生をどう評価するかという質問に対して、彼は次のように答えた。

「全体的にいうと、社会から多くのものを得ていると言えるだろう。この点では、僕は非常に満足している。つまり、ギブアンドテークというなら、私が与えたものより、もっと多くのものを得ていると感じている。」

具体的には、家庭の円満やいまの仕事への高い満足度を言ってくれた。ここから、彼らの満足度は、社会的地位の高い集団（勤め先）に属していることや、キャリアにおける昇進などによることが推測できるだろう。

しかし一方、子供が生まれたことに伴って、家庭の出費が多くなるため、もっと収入が増えればいいなあと漏らしている。

◆自分と社会との関係をどう捉えるか

仕事も家庭もうまくいっているので、今の生活に満足しているだろうか、というプライベート面に関する質問に対して、彼の答えは、社会全体についてのものであった。

「満足しているか、していないかの問題ではない。つまり、僕は、安定感に欠けているんだ。つまり、僕の仕事は安定しているかもしれないけれど、しかし、社会全体がどうなるだろう。十年後、十五年後、二十年後、中国はどこにたどり着いているだろうか。見当がつかないんだ。つまり、個人がどんな人生を送るか、社会全体の方向とつながっているんだ。……（略）たとえば、十年後の中国経済がどうなるかわからない。社会全体の将来ビジョンに対して、あまり自信がない。二番目に、中国の医療や教育、社会保険など、補償が足りないんだよ。もしも、ぼくが重病にかかったら、あるいは会社が倒産したら、僕の生活のすべてが、がらりと変わるだろう。つまり、潜在意識のレベルでは、こういう心配が強くある。」

筆者は直接聞いていないにもかかわらず、Aさんは、社会全体について話してくれたが、これは、今回調査した中間層の対象者の中で、ある人たちに共通して見られる現象であった。中間層としての自覚が芽生え階層の代弁者として語っているというふうには、この現象を安易に判断することは避けたいが、そういった語りから、次のようなことがうかがえるだろう。つまり、彼らは潜在的には社会と自分を一体化して考えており、利益の既得者として、現在の社会発展を肯定的にとらえていることである。社会に対して「不安」や「心配」もあるが、それはあくまでも、今の安定した生活をよりよくしたいための要望であり、反感ではない。彼らにとって、現在の社会と自分を運命共同体として捉える意識がうかがえる。

自分個人の生活が安定していることから、自分の既得利益が今後も保たれるかどうかという観点から、社会全体の発展方向に大きな関心を持っている。

◆折り合いのつけ方

Aさんの場合、現在のレベルよりさらに高い収入を望んでいるが、自分の現在の生活にある程度満足していることが、彼の語りからうかがえる。それは社会的地位の高い集団に属していることや仕事への満足度から由来している。

## 2) 追従型のBさん

Bさんは地方出身で、2006年8月現在30歳、既婚、2人家族。

Bさんは地方大学卒業であり、地方の短期大学で2年間教師をした後、大学院への進学  
の目的で北京に来たが、願いが叶わず、そのまま北京に残り、いくつかの語学クラスで日  
本語講師としてバイトをし、半年前に現在の大手語学学校に日本語講師として雇われ、就  
職した。毎月の月収にはばらつきがあるが、多い場合は7,000円を越える。

### ◆今の自分の生活をどう評価するか

Bさんは、今の生活について、次のような見方を言ってくれた。まずは仕事であるが、  
収入がある程度高いが、回りにいる成功している友人とは全然比べ物にならない。しかも、  
今の仕事というのは、あくまでも上司の下で働く「打工的（雇われ者）」なので、不満で  
ある。自分の理想は貿易会社を起し、自分が上司になり、経済的に成功することである。

### ◆自分と社会との関係をどう捉えるか

自分の成功を実現するためには、人脈、つまり、経済的に成功している友人とのつな  
がりを大事にすることが重要である。

今回の中間層を対象にした調査の中で、Bさんの特徴は、「成功」に対して、「経済的  
にお金持ちになる」というはっきりとしたイメージを持っていること、また、ほかの対象者  
より、周りの友人の影響を率直に語ったことである。Bさんは、経済的・国家権力に近い友  
人や経済的に成功している友人のことを多く語り、一緒にカラオケに行ったりお酒を飲ん  
だりしている。また、彼らの生活ぶりを見て、自分も「野心がそそられる」というふう  
に語っていた。

### ◆折り合いのつけ方

Bさんは今の生活に満足していないが、自分の目標は自他から両方とも認められるもの、  
つまり社会に賛同されるものだというものであるという意識がある。そのため、彼は筆者  
に対し、少しの迷いも見せずに、「経済的な成功」を求める自分の欲望を晒している。そ  
のためには、現段階では、それに向かってひたすら努力すればいい。現在自分はその目標  
に向かって、人脈を作ったり留学の可能性を考えたりするように、頑張っていると語っ  
ている。成功している友人を見ると、いずれ自分も同じように出来ると信じている。自分  
の求めている目標への信頼感、つまり、自分が正しい目標を持っているという自負、と将来  
への希望を持って、彼は現在の不満のある生活に折り合いをつけているように思われる。

2005年に行われた出稼ぎ労働者を中心とする聞き取り調査<sup>2)</sup>では、個人の経済的成功に  
対する期待という意味で彼らの「欲望」を見るときに、彼らの身近の生活圏にいる他者の  
存在が、その欲望の形成のための重要な「媒介者」となり、またそれによって、その欲望  
がさらに高揚したり鎮められたりする様相が見られた。それによって、出稼ぎ労働者の場  
合、身近の生活圏にいる人たち、すなわちこれらの媒介者が準拠集団となり、彼らが自分  
の生活に起こった挫折に折り合いをつけていた。上記で見たように、この点においては、  
Bさんも似たような特徴が見られた。

## 3) 反省型のCさん<sup>3)</sup>

Cさんは、山東省出身、2006年8月現在30歳、独身。

Cさんは、1997年に地方の大学を卒業し、短期間韓国系企業に就職したが、会社の倒産で失業。10ヶ月間の失業期間を経て、通信関係の会社の販売職に就き、その後25歳で自力で、通信関係の会社を「掛靠」（会社登録をせず、他会社の事務所という名義で存在する）のかたちで起業。その後、海外留学から帰った大学の同級生の誘いを受け、青島から北京に来て、二人でIT関係の会社を起業したが、三年後の2006年に、長期の経営不振のため解散。その間、最低限の生活費だけもらっていたという。06年7月に、海外ブランドのクーラーメーカーの北京事務所の販売職に就く。Cさんは大学時代から、ずっと「梅花桩」という拳法をやっており、2006年8月現在でも近くの大学の拳法サークルのメンバーに入っている。

#### ◆今の自分の生活をどう評価するか

彼は、就職後に始めて経験した10ヶ月間の失業期間も含めて、北京に来て起業したこの三年間を、人生の「荒廃期」だととらえており、いまの自分の生活に満足していない。

「もうひとつ（の荒廃期）は、27歳から30歳の間、北京に来てからの三年間。おかげで、今は、大学卒業直後の状態と変わらないよ。何も持っていないから。」

その「何も持っていない自分」を考えるとときに、大きなプレッシャーを感じているという。さらに、今仕事を頑張っている原動力は何かと聞くと、彼は次のように答えた。

「僕の場合、今は原動力よりも、プレッシャーだよ。でも、仕事をするときには、絶対プレッシャーのことを考えてはいけない。それを思うと、もうだめでしょう。ただひたすらやればいい。」

また、中間層の話となったときに、彼はつぎのように語ってくれた。

「僕は、教育程度から言えば中間層かもしれないけれど、経済状況は下層だよ。」

#### ◆自分と社会との関係をどう捉えるか

Cさんの場合、今までの自分の人生を成功したものだと思っていないが、しかし、その失敗を絶対に社会に帰さない。あくまでも、自分の性格に原因を求め、自分自身の心理的問題の解決に改善策を求める。これは、彼の語りの多くの比重を占め、極めて重要な特徴である。

「僕は、ずっと前から、販売の仕事に向いていると思っていない。やっぱり内気なところがあって、人とおしゃべりする時だって、話題の提供者になれない。だから、お客さんと話すとき、話の種をいろいろ出さないと、やっぱり居心地が悪い。いつもお客さんから話題をもらうなんて……僕のほうから、もっと進んで話しかけるべきなのに。」

「前販売の仕事をしていたとき、こうした問題に気づいたんだ。やっぱり、自我から抜けていないというか、まだ自我の中に閉じこもっているところがある。今の性格の中に閉じこもっている。今は前よりだいぶよくなって、まえより広がったつもりだけれど、でもやっぱり、完全には突破していない。もしいつかこの欠点を突破できたなら、仕事もきつとうまくいくよ。」

以上の点は、他人への見方にも現れている。人間関係で会社を辞めてしまうケースがあるという話をすると、彼は、「これは、まだ環境に不適應だよ」「すべての問題は、（善悪の問題よりも）結局は人間の心の問題だよ」という見方を示した。ここから、彼にとって、現在の社会に対し、肯定する立場であり、その社会に適應するためには、自分の心を改造する努力をしなければならないということがうかがえるだろう。

自我の殻を突破してまで、積極的にこの社会に適応していくというその努力の目的は、「成功」を求めるところにあった。彼の言葉でいうと、「もっと多くのものをテーク（獲得）してくる」ことや、「さらなる発展」、「もっと高い目標を手に入れる」ためである。

「何で僕が、先からずっと、自我を越えることが大事だと言っているのか。つまり、自我を越えるには、多くのものを放棄しなければならない。拳法でいうと、もっと上手になるには、外見を気にしてはならない……同じように、会社のことでうまくいかないときも、適宜に、自我を越えなければならない。自我を越えるために、多くのものを捨てなくちゃいけない。」

「映画の『マトリックス』を見たかい。その中で言っているのは、虚構の環境の中では、多くのルールを破ってもいいということだよ。つまり、捨てるということを行っているんだ。あなたを制限しているのはルールではなく、あなた自分自身だって。（略）」

「何で自分に原因を求めるかという、つまり、あなたにとって問題だったことが、ほかの人がやると、すぐに解決してしまうときがあるでしょう。こうすると、自分の欠点に気づくでしょう……僕の場合、自分で、自分の可能性をとて小さく抑えているところがあるんだ。」

「自我を越えるというのは、さらなる発展のためだよ。もっといい目標を手に入れるために……つまり、もっと多くのものをテークしてくるために。」

一方、Cさんの語りから、「新イデオロギー」を全体的に肯定するという立場との間に、微妙なズレが存在する。

「大体の方向、原則的なものが間違っていなければ、本当に、多くのものを放棄してもいいよ。さらに言うと、人間の、ある面の尊厳も含めて。これも捨てなければならないときがある。これを受け入れられない人は、やっぱりプライドが高すぎる。まあ、僕自身も同じ問題を抱えているけれど。」

この語りから、「新イデオロギー」に対するアンビバレントな態度を見せてくれた。つまり、Bさんのように全く問題視しないぐらいすんなりと受けいれているわけでもなく、Aさんのように受益者の立場から社会に対し満足できない部分を指摘しより一層の発展を望むわけでもない。「新イデオロギー」を百パーセント肯定的に捉えるよりも、同意できない場面も多いが、しかし、「もっと多くのものをテークしてくる」ためには、自分の意志や好き嫌いで判断するのは合理的な態度ではない。現存の社会秩序を既存の前提とみなし、違和感を持ちつつもその違和感を消して、社会に適応することを優先する。そのためには、自我を越える努力をする。

#### ◆折り合いのつけ方

Cさんの語りから、違和感を持ちつつも、「新しいイデオロギー」の価値基準に賛同し、そのために必死に「自我を超える」努力をしていることがうかがえるだろう。Bさんのように、自分の目標が正しいものだという自負を持ち、「自我を越える」努力をし続けることによって目標達成が可能だという希望を持って、現在の生活に折り合いをつけていると思われる。

#### 4) 距離型のDさん

Dさんは、山東省出身であり、2006年8月現在30歳、未婚。

1994年に北京市内にある理科系の超名門大学に入学、そこで学部、修士時代を過ごし、2001年に電気関係の大手私営企業に就職したが、一年後に辞任し、IT関係の多国籍企業の北京事務所に就職した。一年あまりで人間関係のしがらみで辞職。現在は、インターネットショップを持っているが、たいした収入にならないという。

Dさんの場合、自分の状況を「良い生活とは言えない」と捉え、現在の不本意を、会社側の体制など、社会側に原因があると説明する。あくまでも、不正や不公平が横行している社会像を持っており、自分とそうした社会状況をはっきりと区別して捉えている。その代わり、多くの人のためになる「公益」事業に、価値を見出している。

##### ◆今の自分の生活をどう評価するか

Dさんの場合、現在の自分の生活について、直接評価しなかった。その理由については、次の項目の「社会と自分の関係について」の語りを見ると、彼は、中国社会における主流の評価基準と距離を置いていること、さらにそういった「主流」の価値観をもって自分を評価したりすることに、違和感があったことがうかがえる。

一方、語りの端々から「今の自分、何か自分の財産持っているか」というと、何一つ持っていない……それが基本の現実だよ。自分の家も持っていないし。一文なしだよ」「仕事をやめてからの現在は、もう自分の意見を表明する権利さえなくなっているよ」というように、経済的成功の基準に達していないことから生まれる、パートナーとの親密関係における現在の自分の立場の生きにくさを漏らしていた。

##### ◆自分と社会との関係をどう捉えるか

Dさんは、自分の考え方と社会の「主流」とは異なっており、その「主流」的なものに批判的な見方をしている。

「なんと言えればいいでしょうか。たまには、自分の考えって、この社会の中で異端ではないかと思う……なんと言えればいいかな。ああいう主流の、言い方、いつもずれているような感じ。違うことを考えている。」

(主流の価値観と言うと?)「今までずっと話してきたお金の中心にしている価値観だ。前から続いてきた権力を中心にしたものはまだ消えていないのに……この二つこそ、現代中国人の身にのしかかる「二つの大山」だよ……この「二つの大山」に屈すると、楽しく生きていける。というのは、この二つの価値観は、社会的に承認されて、推奨されているものだから。それとは違うことを考えると、人から異端と思われたり、ばかだと思われたり、あるいは、単純な人だと思われたりする。」

さらには、こういった自分の利益にしか関心を持っていない、「お金を中心にしている価値観」の代表者として、Dさんは「80年代生まれ」を例にしている。

(80年代生まれの) この世代の人たちって、こういう価値観を持って生きているんだ。つまり、もっと多くのお金をもうけて、それから、人生を楽しむ。他人や社会のことをあまり考えていない。社会的な責任感や公共意識など、あまりない。われわれ70年代生まれの人の場合、比較的……彼らと同じような人ももちろんたくさんいるけれど、自分のこと以外に、社会のことや国のことなど、少し考えるでしょう。もちろん、生活のために稼がないといけなから、空想で終わるかもしれないけれど、頭のどこかでこういう意識がやっ

ぱりあるよ。』

◆折り合いのつけ方

Dさんの語りの特徴として、いくつかの対比軸が存在している。上記で挙げた、社会のことを考える70年代生まれと自分の利益にしか関心を持っていない80年代生まれとの対比以外に、次のような三つの対比軸がある。

※自我の意識のある人、ない人。

「99パーセントと言わないけど、（アメリカ行きを夢見ている人の）95パーセントは盲目的にやっているだけでしょう。目標がないまま、外国に行くことがいいことだとばかり思っていて、新東方（有名語学スクール）に行つて勉強して、試験を受けて。外国に行くことは、多くの人にとって、第一の選択だよ。どうしてと理由を聞いても、理由がないって。ただなんとなくいいと思っているからとか。さらに聞くと、金儲けのためという。何々がやりたいから、たとえば研究とか、何かに興味があるからとか、何かの計画があるから海外での勉強をひとつの有効な手段だと思うからだとか、はっきりした答えが出ないよ。」

※自我の意識のなかった自分、今の自分。

「大学院を終了するまで、僕は何をやりたいか、自分でもよくわからなかったよ。小さいときに何かやりたいことがあったかと聞かれても、よくわからないの。大学、大学院にいたときでも、よくわからなかった。そういう感覚がないの。ただ流されるままに生きていた。試験を受けたり、読むべき本を読んだり。特に求める夢があつて、何かをしないと気がすまないようなことはなかった。」「（海外留学に行かなかった理由という）、そのとき、僕は度惑っていた。そのとき、考え始めたんだ。何で外国に行かなければならないの。それなりに、語学の勉強など、準備はしていたけれど、試験を受けなかった。いくら考えてもわからなかったから。なんで外国にいかなくちゃいけないのか。」

「（海外留学は進退の問題よりも）自我の意識があるかないかの問題だよ。自分の本当にやりたいことをよく考えていたかの問題。」

（辞職後）「お金のことだけなら、それは簡単なことだ。前の会社と給料の変らないところを見つければいい話でしょう。でも、何が僕の本本当にやりたいことを考えると、やっぱり……」

※官僚化と不正が横行する電気関係の国有企業や人間関係のしがらみが多い私営企業でうまくやっていける人と、うまくやっていけない自分。

「電気関係の国有企業では、人間関係で昇進を遂げる場合が多い。実力で出世する人がますます少なくなった。」「グレーゾンが大きい。」「僕が大学時代そこで実習をしたことがあるけれど、入つてすぐ聞かれたんだ—あなたの両親は、どの国家機関にいるの。や、うちの両親は地方にいるんですけど、と言つたら、すぐに態度がガラッと変つたよ。つまり、バックグラウンドがないと、その中に入つても、体制の中には入れない人間だよ。」

「そういう環境にうまく適応できたなら、実習した経験があるから、あそこはとてもしい就職先になっていたが、でも僕、ああいうのに慣れなくて。」「そういう人がそういう環境にいて、魚が海に戻つたみたいに、自由自在にやっていけるよ。言うこととやっていることをはっきり分別できるし。」

「何かを真剣にやりたいなら、わき道を歩かないとうまくいけぬ。不正なことをやると、逆にうまくいく。関係を上手に利用し、法律の隙を利用できると、楽しくやっていけ

るよ。法律をちゃんと遵守してやると、うまくいかない……中国社会は昔から関係第一だから、関係で物事を運ぶというやり方は、これからも変わらないでしょう。」

上記のように、Dさんの語りの中にいくつかの対比軸が多く存在している。この点から、彼は、「お金を中心にしている価値観」が支配的な社会と自分との間に、距離を置いていることがうかがえる。それだけでなく、上記の対比軸で見られたように、経済的な成功を得るには、多くの場合不正行為や「自分を捨て」ることが求められるという社会像を持っている。そういったことに同調しなく「社会的な責任感や公共意識」のある自分像を持つことによって、現在の「お金を中心にしている価値観」と距離を取っていることが分かるだろう。

## 5. 考察

以上、中間層の調査対象者を、同調型、追従型、反省型、距離型という四つのパターンに分けて、市場価値や消費主義神話を内実とし、個人の経済的成功を表象とする新イデオロギーを巡る中間層の対応を見てきた。

まず、この「新イデオロギー」の時代を生きているものとして、社会からのプレッシャーを何らかの形で受けていることを認める必要がある。Aさん、Bさん、Cさんそれぞれ「社会から多くのものをもらっている」、「経済的な成功」、「さらなる発展」「もっといい目標」「もっと多くのもの」などの言葉で、自分の現在の生活について何らかの評価をしている。

またDさんは自分の生活についてはっきりとした評価をしなかったが、「主流」の、「お金を中心にしている価値観」というものの存在を持ち出し、その価値観と距離を取ろうとすると、「異端と思われたり、ばかと思われたり」と語っていた。この点では、改革開放後の時代精神の変容の結果である、「新イデオロギー」の存在を物語っているだろう。

また、CさんとDさんの語りの中に、共通して、「自我」という言葉が多く使われた。しかし、その意味は違っていた。Cさんの場合、もっと多くのものを得るために、自我を超え、仕事や周りに環境に適応するという文脈で使っているが、Dさんの場合、自我の意識がないことにより、人々が海外に行くことを安易に求めたり、お金儲けに走ったりする。両方とも、社会の「主流価値観（Dさん語）」と付き合う中で、大きなプレッシャーを感じている表れだといえよう。

しかし一方、彼らは、「新イデオロギー」に対して、それぞれ違う意味世界を生きており、また違う対応の仕方を生み出している。

同調型のAさんは、経済的に高い収入を得ているわけではないが、社会的地位の高い集団に属していることやキャリアの昇進などによる現在の生活への満足度が高く、社会への同調が見られるものの、「新イデオロギー」に過度にコミットメントする姿が見られない。追従型のBさんは、経済的成功を目標にしており、改革開放後に現れた「新イデオロギー」にコミットメントする立場を取っており、その目的達成のために人脈作りなどの面において特に力を入れている。一方、Cさんは同じように経済的成功を目標にしているが、それはBさんの対処戦略とは違い、主に仕事上のキャリアアップを通して目標達成をしようとする。そのために、「自我の殻」を突破することが重要だと認識している。Dさんは以上

のAさん、Bさん、Cさんとは違っており、「新イデオロギー」に対して明らかな距離を取っており、経済的な成功を得るには、多くの場合不正行為や「自分を捨てる」ことが求められるという社会像を持っている。さらにそういったことに同調せず、「社会的な責任感や公共意識」のある自分像を持つことによって、現在の「お金を中心にしている価値観」と距離を取っている。

## 注

- 1) 聞き取り調査の方法及び表記については、桜井（2002）を参照した。
- 2) 2005年3月に北京市内で出稼ぎ労働者7人を中心に実施したものである。
- 3) Cさんには、2回インタビューをしたが、本論で使った語りは、二回目の記録によるものである。

## 参考文献

- 王宏図『都市叙事与欲望书写』南寧、広西師範大学出版社、2005  
作田啓一『個人主義の運命』岩波新書、1981  
桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002  
孫立平『断裂—20世紀90年代以来的中国社会』北京、社会文献出版社、2004  
園田茂人『現代中国の階層変動』中央大学出版部、2001  
程文超『欲望的重新叙述』南寧、広西師範大学出版社、2005  
馬航飛『90年代以来中国小説的欲望叙事研究』南京大学博士学位論文、2005  
陸学芸『当代中国階層研究報告』北京、社会文献出版社、2002

## Abstracts

Since the adoption of the reform and opening-up policy, China has been experiencing a surge of the “New Ideology” of which the essence centers on the market and consumerism. This paper examines how the middle class people in Beijing are affected by the emergence of the “New Ideology” from the following three perspectives: assessment of their satisfaction with their daily life, how they perceive themselves in relation to society and how they reconcile the differences. Based on the findings obtained through interviews with middle-class people in Beijing, the author summarized their various responses into the following four types: positive conformers, obsequious followers, critical reviewers and those who stay aloof.

キーワード：欲望 新イデオロギー 中間層

(WANG Feng)